

が変わってしまった。
 このことを高校に通っている姉に相談した。
 「あれは指に力を入れなくても、そうなれば
 いいなあとか、こうならおもしろいなあって
 いう方に動くようになっているのよ。気にす
 ることなんてないんだから」と教えてくれた。
 次の日、姉の話を学校でしてみた。しかし、
 だれも信じてくれない。わたしが「だいじよ
 うぶなんだから」と言うと、みんなの視線が
 冷たい。みんながわたしに距離を置くように
 感じられた。わたしにはこれ以上コックリさ
 んの真実を話す勇氣はなかつた。
 三年生のときにあったできごとを思い出し
 たのは、ガリレオの伝記を読んだからだ。
 ガリレオはルネッサンス期の天文学者だ。
 ローマ教会の古い考えに縛られた時代から、
 科学が認められはじめようとしている時期だ。
 だが、当時のヨーロッパでは、魔女狩りが行
 われていた時代だった。占星術が人の運命を
 支配すると考えられているような時代だった。

疑いもせず、コックリさんを信じ込んでいた三年生のときのわたしと似ている。ガリレオは教会の教えに逆らい、地球が太陽の周りを回っている地動説を唱えた。ガリレオが正しいのだが、絶対的な権力者であるローマ法王庁に異議を唱えるのだから、命を奪われる危険もある。当時、ブルーノという地動説支持者の天文学者がいた。天動説を教義にしているローマ教会に異議を唱えたが、役人に捕まり火あぶりになってしまった。ガリレオも、いつ捕まっても、火あぶりにされるまでも表だって地動説を唱えるのは、やめることにした。死刑が怖いからと地動説を捨てたのではない、さらなる研究を続けたのだ。コックリさんがはやっていたとき、わたしはみんなから仲間はずれにされるのが怖くてだまってしまった。「らいしゅう」死ぬと言われた。〇〇君をはげますよりも、仲間はずれにされない方を選んだ。

仲間はずれも怖いが、死刑になるのはもつ
 と怖いはずだ。それなのに研究を続けるガリ
 レオは、すごい勇気の持ち主だと思う。
 ガリレオは晩年に宗教裁判にかけられる。
 六十八歳のときだ。裁判というのは名ばかり
 で、一地震説は間違いであると思えろ」とい
 う脅迫だった。死刑になるかもしれない恐怖
 感が襲う。六十八歳の老人ガリレオは、繰り
 返し行われた厳しい脅迫に疲れ果ててしまっ
 た。ついに「地震説は間違いでした」と誓約
 書に署名をさせられる。だが、「それでも地
 球は動いている」とつぶやいたのは最後の力
 を振り絞ったの抵抗だったのだろう。ガリレ
 オが生きていた時代、十六世紀のヨーロッパ
 の平均寿命は二十歳、十七世紀で二十五歳だ
 そうだ。当時の六十八歳は相当な高齢である。
 この年齢で厳しい脅迫を受けながらも、何
 ケ月もの間「地震説は間違いだ」と認めなか
 ったガリレオの気力、地震説に対する情熱は
 計り知れない。

コックリさん事件のとき、わたしには勇気が
 なかった。今でもないと思う。来週死ぬと
 コックリさんに言われた〇〇君に「コックリ
 さんなんてウソなんだから」とは言えなかつ
 た。言ってしまったら自分がいじめられる側
 に回るからだ。でも、正しいことを言うのに
 勇気が必要なんておかしい。正しいことを言
 って、仲間はずれにされたり、いじめられた
 りするのは納得できない。
 みんなが正しいと信じていると、間違っ
 ていることでも真実のようになってしまふ。そ
 れはガリレオの時代も今も変わりはない。し
 かし、だれかがガリレオのように真実を言っ
 て、それを認める勇気をみんなが持たなけれ
 ば、いじめや仲間はずれはなくならない。
 今のわたしにはガリレオになる勇氣はない。
 でも、強くなつてガリレオのように自信を持
 って真実が話せるようになりたいと思う。
 だれかが始めなければならぬ。だからわ
 たしから始めたいと思う。